明治初期女子留学生の生涯

——山川捨松の場合——

秋山ひさ

(1)

明治初年、新政府が西欧の先進文化導入のために、もっとも重要な手段として積極的に推進した政策の一つに海外留学がある。政治、行政、技術、学術の分野におけるリーダーの養成は、学校の開設、教育の開始にあたって急務であり、留学によって新しい指導的人材を育て、日本開化の先導者たらしめようという気運は新政府に一致したものであった。明治三年には、地方行政に携わる金沢、鹿児島など全国十五の大藩にそれぞれの藩から二名ずつの海外視察員を派遣するように命じているし、富国強兵をめざすための軍事、兵制の視察、留学には兵部省から、工業の振興と工業教育の推進には工部省から、また学術・教育の発展のために南校、東校の教官を、後には学生を、それぞれ海外派遣したり留学させたりしている。開拓使からの海外留学生もこういう新政府の海外進取の姿勢のうちに募集されたのである。

戊辰戦争最後の地、函館が政府軍の手に陥ると、蝦夷は北海道と改められ、政府は開拓使を設けて北海道開拓の大事業にとりかかった。開拓次官に任じられた黒田清隆は、明治四年正月開拓事業調査のために欧米を視察するにあたって、まず米国に渡って農務局長ケプロン General Horace Capron を顧問に招き、共に欧州を一巡して帰朝した。黒田がケプロンの力をかりて北海道の開拓に功績を残したことは、本来の職務上から当然のことではあるが、今ひとつ、黒田清隆の欧米視察は新しい女子教育への道を開くきっかけとなった。彼の建議により五人の少女が海を渡ることになったからである。明治初年の進取の気風と新時代の女性への期待は、少なくともこの時点では、大きなものがあった。

一体どういう背景の下に十才前後の少女がアメリカへ渡り、彼女達は帰国後どう生きたのか、五人の女子留学生のうち、津田梅子を除いては多くを知られていない。この小文は、残る四人のうちの一人、山川捨松の生涯を中心に、この留学が個人の人生の上にあるいは明治社会の上にどのような意味をもったかをさぐろうとするものである。

(2)

明治四年(一八七一年)一月、北海道の開拓事業を進めるにあたって必要な、外人技師・顧問の雇い入れと開拓器械の購入、外国における拓植の状況を調べるために欧米に渡った開拓次官黒田清隆は、短い滞米中に、米国女性の地位が高く、環境に恵まれていることに強く印象づけられた。彼は、米国の女性が男性と同じように教育を受け、平等に扱われて

いることを知った。黒田はすでに弁務公使としてワシントンに駐在していた森有礼と日本女性の地位について議論し、しばしば長い論争を重ねた。当時公使館に勤めていたアメリカ人チャールズ・ランマン Charles Lanman は、その後津田梅子を十年余りも預った人物であるが、黒田清隆と森有礼のその時の論争が飛躍して、日本の文明を進めるには、教養ある外国人と結婚するのが早道であるとして、熱心に黒田は独身の森に米国女性との結婚をすすめたほどであると伝えている。[1] 維新政府の若い指導者たちの中には、日本の文明開化を急ぐあまり、国語は日本語を廃して英語にしようなどという極端な欧化思想を唱えるものがいたほどであるから、黒田の国際結婚奨励論もあながちその場の冗談でなかったかもしれない。

ともあれ、北海道をどのように開拓するにしろ、そこに無能な人間を送るのは全く効果がない。まず第一に手をつけねばならないのは女性を教育することである。十才以下の子どもは全く母親の影響下にあり、次の世代が立派に育てられるかどうかは女性にかかっている。従ってまず女性を教育することが先決であるというのが彼らの到達した結論であった。黒田清隆が帰国後太政官へ提出した建議には次のように述べられている。

「夫レ開拓ノ要ハ、山川ノ形勢ヲ審ニシ、道路ヲ通シ、土地ノ美悪ヲ察シテ、牧畜栽培ヲ盛ニシ、以テ生ヲ厚シ、俗ヲ美ニスルニ在リ、然而テ之ヲ為スハ、人才ヲ得ルニ由ル、人才ヲ得ルハ教育ニ在リ、今ヤ欧米諸国、能ク子弟ヲ教育シ、児子未タ襁褓ヲ免レスシテ、能ク菽麦ヲ弁ス、是レ他ナシ其母固ヨリ学術アリテ、幼稚ノ時ヨリ能ク其ノ教育ノ道ヲ尽スニ由ルナリ、然ハ則チ女黌ヲ設ケ、女学ヲ興スハ、人才教育ノ根本ニシテ、一日モ忽ニス可ラサルナリ、他日果シテ此黌ヲ設ケ、人材教育ノ基ヲ立ルハ、今ヨリ幼年ノ女子ヲ撰ミ、欧米ノ間ニ留学セシメ、其学資ハ、当使定額中ヨリ之ヲ措弁スヘシ」

この意見に岩倉が賛成したので政府は女子留学生派遣を決定した。早速女子留学生を募集したが、未知の外国へ幼い女の子を行かせるなど当時の日本人には到底考えられず、一人の応募者もなかった。政府は威信にかけて再募集した結果、結局、士族出身で旧幕府側の娘五名がこれに応じた。

東京府士族秋田県典事	吉益正雄娘	吉益　亮	一五才
東京府士族外務中録	上田　畯娘	上田　悌	一五才
青森県士族	山川与七郎（浩）妹	山川　捨松	一二才
静岡県士族	永井久太郎養女	永井　繁	九才
東京府士族	津田仙弥娘	津田　梅	八才

ここに記された年令は日本風の数え年である。これら五名の父兄は多少とも外国の知識を持っていた人達ばかりである。吉益亮子の父は医者吉益東洞の子孫と伝えられており、上田悌子の父上田畯は外務省に出仕していたので外国事情に通じていた。ちなみに、悌子（後に貞子）の姉孝子は上田敏の母である。

永井繁子は佐渡奉行属役益田孝義の四女であるが、五才の時、幕府の軍医永井玄栄の養女となり、徳川家が駿府に転封されて以来、養父に従

って沼津に移住し、そこで幼少期をおくっている。実兄の益田孝は後の三井物産社長である。

津田梅子は外国奉行の通弁、津田仙の次女で、仙は幕府の随員として慶応三年に渡米している。この旅行で米国の軍事、産業、学術などあらゆる面にわたって深い感銘を受けているが、とりわけ西洋の科学的農業に目を開かれ、幕府瓦解後は農園を開いて西洋野菜を栽培する事業をおこして成功している。後に北海道開拓使嘱託になり、民部省勧農寮に勤めを変えたが、ここを退職してウィーンで開かれた万国博覧会に随行して帰朝後は、農学の本格的な普及を志して『農業雑誌』を発行し、「学農社農学校」を創立している。

山川捨松のばあいはどうか。その生い立ちをみておこう。

(3)

山川捨松は、会津藩郡奉行主役山川尚江重固の末女として、万延元年(一八六〇)二月二十四日会津若松で生れた。(幼名咲子)。父重固は家督を嗣いで間もなく、祖父に先立って四十九才で病没したので、父親の死後五〇日頃生れた捨松は、生れながらに父の顔を知らずに、祖父兵衛重英と母えん(雅号唐衣)に育てられた。重英は山川家八代目の当主であったが、会津藩財政を立直した手腕を認められて、三百石から千石に取立てられ、勘定奉行家老に抜擢された山川家中興の人物であった。伝えられるところによると、重英は江戸詰家老だったとき、蘭法医から種痘の説明を聞いてすぐに孫娘たちに施行しているし、古い兵学者の反対を押し切って会津藩に西洋銃を使用する端緒を開かせたという。戊辰戦争直前には、武家も町家も家蔵の宝物汁器を売却して新式銃のための軍用金をつくるように建言したが容れられず、山川家のみこれを断行したのであるが、これを笑った者は銃での戦いに敗れ、宝物汁器も兵火に焼かれたり、敵に掠奪されたりしてしまい、人々ははじめて重英の先見に服したという。[2]

このように重英が進取の気性に富み、先見の明があった点を、捨松ら孫たちがよく受け継いでいるのは、彼らの生涯をみればわかるであろう。捨松の母えん(雅号唐衣)は会津藩士西郷氏の出で、二〇才で山川家に嫁したが、妹(雅号玉章)と共に会津藩きっての女流歌人だったといわれている。唐衣は十二人の子女を産んだが、うち五人は夭折し、残る七名は上から、二葉、浩、三輪、操、健次郎、常盤、そして捨松である。[3] 母唐衣は夫の歿後剃髪して勝聖院と名乗ったが、きわめて真面目で実直な人柄で、子女の教育は厳格であったという。日頃は軍記物や修養書を愛読し、冬の夜長には『信長記』や『水滸伝』などを家族に読み聞かせたりした。当時の武士の妻女はいつも懐剣を帯びていたものだが、通常、懐剣の袋は剣より長く、その先を折返えして紐でくくってあるものなのに、唐衣のそれは剣の長さだけにしてあった。それはいざというときすぐに抜けるようにという心構えからであったという。浩が藩兵を率いて京都に赴いた時、

天か下とどろく名をはあけすとも　おくれなとりそ武士(もののふ)の道

と詠んでいる。[4] 唐衣の子女の教育が武士道をふまえたものであったこと

は充分に知れよう。

捨松は兄姉と共に、祖父と母の愛情の下におだやかな幼年の日を送ったが、戊辰戦争でその生活は一変した。捨松八歳のときである。幕末明治の内戦で、東北列藩わけても会津藩ほど悲惨な運命を辿った藩はないといってよい。幕府より京都守護職を命ぜられて禁裏の警固につき、薩長の矢面に立つ立場になっただけでなく、後には賊軍の汚名を着て若松城を攻められ、飯盛山に十六、七才からなる少年白虎隊が全員自刃して果てた（後に一名のみ蘇生）のは、その悲劇性をもっともよく象徴している。

戦ったのは男子ばかりでなく、婦女子も老人から子どもまで、敵弾のふりそそぐ中で泥まみれになって奮戦しているが、武士の家族で籠城して戦ったもののほかに、戦う男たちの足手まといになるまいと女たち全部自決したものもあった。予期せぬ早さの侵攻に、避難の準備が十分でなかった会津若松の城下は官軍兵士による略奪と暴行と殺傷がなすがままに行なわれたという。

山川家の家族は城の早鐘を合図に、母唐衣、姉妹四人それに浩の妻が城に入って戦っている。浩は一方の前線の将として任につき、健次郎は年令が一才満たなかったので白虎隊本隊には組入れられなかった。最初十五才以上十七才以下の少年で白虎隊が組織されたのだが、後に十五才では年が若すぎると除隊され、本の読める者は残しておこうとフランス語を学ぶように命じられたのである。[5]

籠城した婦女子のうち、上士の妻女たちは看病方に、下士の妻女たちは兵糧方に分担して働いた。捨松の回顧には次のように記されている。

「当時私は八才でした。会津戦争も終りに近づく頃には、武士の家族はほとんど城に籠城致しました。家族というのは女子供のことで男達は皆戦いに出ていました。……女子供は城の中で出来るだけ男達の手伝いをするため、仕事の種類によって隊を編成しました。米を洗い、炊き出しをする者、家の中の仕事をする者、前線にいる兵士達に弾薬を作る者。幼かった私に割り当てられた仕事は、蔵から鉛の玉を運び出し、弾薬筒につめられたものを、また他の蔵へ運び込むことでした……。包囲戦も最後となった頃、敵軍はお城の周りの丘の上に大砲を据えつけました。そこから毎日のように大砲の弾が私達の頭の上をかすめお城の中に落ちてきました。その弾を拾い集めて積み上げておくのも私の仕事の一つでした。母、姉、義姉そして私も、いつも死ぬ覚悟は出来ておりました。怪我をして身体が不自由になるより即死する方を望んでいました。ですから、私達はいつも母と約束を致しておりました。もしも私達の中で誰かが重傷を負った時には武士の道にならって私達の首を落して下さいと。

ある日私達が大急ぎで食事をしていると、砲弾が部屋の中に落ちてきて破裂したのです。義姉は胸を私は首をやられてしまいました。私の傷はたいしたことなく、一週間ばかり床についただけで自分の仕事にもどることが出来ましたが、義姉の場合はそうはいきませんでした。助からないことは、もう目に見えていましたので、使いの者を前線まで走らせ、兄にすぐ城へもどり義姉に最後の別れをするように伝えました。早くこの苦しみから救って下さいと苦しい息の下から頼む義姉の声を聞くことは、とても耐え難いことでした。『母上。母上。どうぞ私を殺して

下さいませ。あなたの勇気はどこへ行ってしまったのですか。さむらいの妻であることをお忘れですか。私達の約束をお忘れですか。早く私を殺して下さい。お願いです。』でも気の毒に、母は余りのむごさに、すっかり勇気を失ってしまったのです。約束を守るだけの強さは、母にはなかったのです。あわれな義姉は拷問のような苦しみを味わいながら、兄が到着する二、三時間前に息を引きとったのでした。

会津戦争最後の三十日間、敵は私達の城のすぐ側まで攻めてきており、城の南東に砲台を置き、そこから精力的に打ちこんできました。我軍はもう百計つき果て、最後の手段をとることになりました。城の東方に夜間の突撃をするのです。真夜中、すっかり寝静まった敵陣を襲い、敵を追い散らし、双方に多数の死者や怪我人を出しましたが、我軍は無事城にもどりました。しかし、翌朝には敵軍は再び反撃を開始し、我々の損害は大きく、もう絶対絶命の立場に追いこまれてしまいました。それでも降伏する決心はつきかねていたのです。そこで、私達にはまだ充分に余裕があると敵に思わせるために、一体何をしたと思いますか。女の子達は祝日などによく遊ぶ凧を揚げるように言われたのです。男の子も一緒に加わり、食糧もすっかり底をつき、飢えのためやむなく降伏するまで揚げ続けたのです。

不思議なことに、私の未来の夫となる人が、敵軍の中にいて、この夜間の襲撃の際負傷したのです。私が注意深く積み上げていた大砲の弾を打った敵軍の一人と、将来結婚するようなことになるとは、夢にも思いませんでした。」

これは一九〇五年にアメリカの「トゥエンティース・センチュリー・ホーム」という新聞に載せられた記事の抜粋である。[6]

戦争はいずれの場合でも敗れた側に悲惨な現実が待っている。会津は籠城一ヵ月、精魂傾けて戦うも戦局利あらず、涙をのんで全面降伏する。やがて沙汰がおりて、本州最北端の下北半島、斗南へ転封になる。会津藩は二十三万石の大藩であったのが、わずかに三万石の斗南藩となった。しかも斗南は火山灰地の上、半年は雪におおわれる痩地で実質は七千石にすぎず、到底藩士全部が食べていくことはできなかった。耕作などしたことのない武士が、原野に三、四坪の草葺の掘立小屋を建てつらねて開墾を始めるのだが、とても一冬越すのが危ぶまれる状態で、餓死、凍死を免れるのが精一杯であった。

一藩丸ごと流罪にも等しい乞食同然の過酷な暮しをしている中で、山川家の生活も決して楽ではなかった。祖父重英は会津滅亡の悲運に遭遇した半年後、八十五才で亡くなったが、浩は斗南藩の重臣として責任ある立場にあっただけに、この地をお家復興の地と定め、あらゆる困難を排して殖産に心を砕き、さきには砂鉄を精練して農器具を造り、のちには平貝の缶詰製作をも試み、小湊の港を整備して着々と開発の基礎を築いたが、明治四年に廃藩になって藩主もいなくなったので斗南を去り、東京で浪々の身となる。

捨松にとって、兄姉の中でも後にとりわけ大きな影響を受けることになる次兄健次郎の動向を捨松の生涯と平行させてみておこう。

健次郎は若松城落城直後収容された会津藩士の中で最年少であり、前途有望な藩の子弟として、同じ立場にあったもう一人の少年と共に、藩命により秘かに収容所を脱出して新潟に行き、しばらく和漢の書を学ん

だが、明治二年東京に出て、芝増上寺に開かれた会津藩の斗南藩校において英語を学んでいる。間もなくこれが閉鎖されると、沼間守一の私塾に入って居候の身で勉学をすることになった。彼はここではじめて初歩の数学を学んだという。学術を教えるところとして当時評価の高かったのは、大学南校をはじめ、福沢諭吉の慶応義塾、中村敬宇（正直）の同人社、福地源一郎の共慣義塾などであったが、藩も山川家も窮乏のどん底に喘いでいて、とてもこれらの学校へ入学することは適わなかったのである。[7]

捨松は、次男大山柏が思い出として語るところによると、斗南藩時代に函館のアメリカ人宣教師に預けられたという。[8] それがどういう理由でなのか、またその宣教師の名前も、その時期も不詳なのであるが、もしこれがほんとうであるなら、後のアメリカ留学の芽はここに宿っていたともいえる。

（4）

開拓使による留学生派遣は山川家に二重の機会をもたらした。黒田清隆が開拓事業調査のため欧米視察した際、その視察団に同行する留学生が募集され、山川健次郎が留学生の一人に選ばれたからである。それは将来の北海道の開拓事業に携わる官吏を養成するためのものであるから、寒冷地の東北出身者を加えたいという考慮が選抜の際に働いたといわれている。もっとも開拓使派遣の留学生は、帰国後は他の官省に就職したり、別の領域で活躍した者が多く、開拓使に任官した者の数はそれほど多くなかった。健次郎も帰国後は東京開成学校教授補に就任し、爾来東京帝国大学教授・総長としてその任に就いている。

留学生が西欧の機械文明の発達にいかに驚嘆し、日本の後進性を自覚したか、黒田清隆ら一行を乗せた汽船ジャパン号がサンフランシスコへ向けて航行中に、健次郎が体験したエピソードによくあらわれている。

当時、健次郎は攘夷の思想が抜けきらず、外国人などを尊敬する気持はなかった。ところがある日、丁度太平洋の真中で、今晩か明日の夜明けに、本船は日本へ向って航海している太平洋郵便会社の船に出会うだろうから、日本へ手紙を出したい人は用意しておくようにと告げられ、太平洋を東西から出発して進航する二隻の船が、こんな広い海上できちんとうまく出会うなどと果して出来るものだろうかと疑ったいたら、その夜半三時頃、両船がぴたりと遭遇して、二町ほど隔てて停船するや直ちにボートを下ろして郵便物の交換をしたのである。健次郎はこの有様を眺めて、欧米の学問が如何に進んでいるかつくづく感嘆し、渡米後、将来わが国の文明を発展させるには理学を興さねばならぬと、イエール大学で物理学を学ぶに至るのである。[9]

さて、捨松の親代りをしていた十五才年長の長兄浩が、妹を留学させることにしたいきさつは定かでないが、浩は慶応二年（一八六六年）に露国のペテルブルグに向う外国奉行・小出大和守の随員として、ヨーロッパへ京から旅立った経験があり、すでに外国諸事情を見聞していたことが、健次郎につづいて捨松をも米国に渡らせることにしたのであろう。来たるべき時代に敏感に応じ、果敢で適確な判断を下す浩の活動

は、会津での戦争以降すでに証明されている。

しかし捨松の場合、すでに兄の健次郎が米国に渡っているとはいえ、山川家では十一才になるやならぬの末娘をアメリカへやるにはよほどの覚悟を要したであろう。捨松の幼名は咲子なのであるが、出発に際して母唐衣は咲子を呼んで懐剣を渡し、「もはや今生では二度と会えるとは思っていないが、捨てたつもりでお前の帰えりを待っている。今日からお前を捨松と呼ぶ」といって送り出している。[10] 政府の計画による留学とはいえ、世間の反応は冷やかで、「ずいぶん物好きな親たちもあったものですね。あんな娘さんをアメリカ三界へやるなんて父親はともかく、母親の心はまるで鬼でしょう」という非難の声さえあったのであるから、母唐衣の胸中を察するに余りある。会津での敗戦からわずかに三年、現在の生活の困苦は堪えがたいものであり、家老の娘であった捨松にとってもこの留学に期するものがあったにちがいない。

五名の留学生は出発前に皇后から茶菓と紅縮緬一匹と「其方、女子ニシテ洋学修行ノ志、誠ニ神妙ノ事ニ候。追々女学御取達ノ儀ニ候ヘハ、成業帰朝ノ上ハ、婦女ノ模範トモ相成候様心掛、日夜勉励可レ致事」[11]との沙汰書を賜り、岩倉具視を全権大使とする使節団に伴われて、明治四年（一八七一年）十一月アメリカへ向けて横浜を出帆した。

（5）

捨松ら一行は新暦一月十五日にサンフランシスコに到着後しばらくその地に滞在して、ワシントンには二月二十九日に着いている。アメリカ生活に慣れるようにワシントンで半年余り語学を学ぶが、年長の吉益亮子は渡米直後から眼を患い語学の勉強が出来なくなったため、また上田悌子も健康が勝れぬため、帰国することになる。吉益亮子は帰国後、青山女学院の前身である海岸女学校の教師をし、明治十九年六月に東京京橋に女子英学教授所を開いたと伝えられているが、その年の秋にコレラで病没している。上田悌（貞）子については何の記録もない。わずかに大正五年に津田梅子宅で留学したときの四人が、明治五年米国での一別以来邂逅して旧交をあたためたとあるから、[12] 主婦桂川貞子として平凡な結婚生活をおくったと思われる。

ワシントンでの女子留学生の五名、右より山川捨松、津田梅子、吉益亮子、上田貞子、永井繁子（吉川利一著『津田梅子』より複写）

残る三人のうち、梅子はワシントン郊外のジョージタウンに住む日本弁務使館書記官チャールズ・ランマン（Charles Lanman）方に、繁子はフェアヘイヴンのジョン・アボット（Rev. John S.C. Abbott）方に、そして捨松はニューヘイヴンのレオナルド・ベーコン（Rev. Dr. Leonard Bacon）方に預けられた。三人とも熱心な親日家で、従来より日本の学生たちの面倒をよく見ていた。レオナルド・ベーコンはニューヘイヴンのセンター・チャーチの牧師を勤め、イエール大学神学校の教師を兼ね、"New Englander"（北アメリカ東部の牧師たちの論評紙）、およびニューヨークの"Independent"（当時、宗教紙としてはアメリカでもっとも強い影響力をもち、その発送リストには六千余名の牧師の名が連ねられている週刊紙）の創立者の一人で、後者の記者でもあった。

捨松より一年前にアメリカに渡っていた健次郎は、ニューヘイヴンの北西にあるノールウィッチに移り住んで中学に通い、イエール大学の理学校（Sheffield Scientific School）を目指して勉強していた。捨松が大使一行と共に留学してくるのを知った健次郎は、女性が米国で教育を受けることに不安を抱き、それに反対する手紙をすぐさま森有礼に書き送り、妹をどこへもやらず自分の眼の届く範囲の近辺に住わせてもらいたいと申出ている。しかし森有礼と女性の教育に関する論議を重ねた結果、自分の見識に誤りがあることを悟り、その後は妹が米国にいることを喜ぶようになったという。[13] 梅子がワシントン郊外のジョージタウンに住むランマン宅に預けられたのに対して、捨松がニューヘイヴンのベーコン家へ預けられることになったのは、この時の健次郎の意向を森有礼が考慮したものと思われる。

イエール大学スターリング図書館にある「ベーコン家文書」には、健次郎の出した手紙が二、三残されているが、その中の一通に次のような手紙がある。

ノールウィッチ、一八七二年八月一九日

拝啓　あなたからのお手紙を、ベーコン博士のお手紙と共に拝受いたしました。その件につきご返事申しあげます。博士のおっしゃいますことはもっともと存じます。私も彼女が博士の家族と一緒に教会へ出席し、毎日の礼拝に出席することに反対はしないでしょう。しかしどのような宗教上の導きも捨松に与えないよう、博士にお願いいたします。それは私が彼女に行います。といいますのは、キリスト教徒になることは、日本政府によって罰せられるからです。週十五ドルは多すぎる補償だとは思いません。補償は丁度私が予期していたものであると博士に告げて下さい。

最近ワシントンの公使館の秘書から一通の手紙を受取りました。その手紙で、日本の少女たちが先生を雇って今勉強していることを知りました。彼女たちは来る十月までその先生の下で学ぶとのことでした。それ故この前、妹はニューヘイヴンに九月に来るだろうと申しましたが、十月以降になると思います。

敬具

K・ヤマカワ[14]

この手紙の宛先はヴァン・ネイム（Van Name）であるが、彼はすで

に健次郎と知り合いで、捨松をベーコン家へ預ける労をとった人物と思われる。レオナード・ベーコンは捨松を引受けるにあたって、教会の礼拝に出ることの承諾を実兄の健次郎に求めているのが注目される。牧師の立場からしても、捨松を家族の一員として扱うかぎり、これは当然の要請である。これに対して健次郎は、礼拝に出席するのは構わないがキリスト教徒になることは拒否している。切支丹禁制の高札がはずされたのは明治六年（一八七三年）二月二十一日のことであり、留学に際して言い渡された「洋行心得書」にも[15]

一、外国ノ人別ニ加ハリ候事、並宗門相改候儀堅ク御制禁ノ事

という一条が含まれているから、日本政府の留学生としての自覚を健次郎は固く持していたのである。しかも、政府から禁じられていたからという理由からだけでなく、当時、健次郎自身が、キリスト教は邪教であると固く信じていて、五年間の留学中一度も教会へ行っていないのである。毎朝大学附属の教会で行われる礼拝にも許可を得て欠席するという徹底ぶりであった。この信念と態度からすれば、捨松の教会出席を認める文言は、牧師であるベーコンによほど気を配っているといえる。もっとも健次郎は後年、外遊する学生を送る訓話として、外国に行ったならばできるだけその国の習慣に従うべきであるとして、自分の若い時の米国でのかたくななキリスト教拒否の姿勢を、そんなにまでするにはおよばなかったと反省している。[16]

健次郎が捨松に対してもっとも心を配ったのは、捨松が幼いだけに米国の生活にすっかりなじんでしまって、アメリカ人化してしまわないかということであった。中でも日本語を忘れてしまうことをもっとも怖れ、毎週日本語のレッスンをするように捨松に厳命しており、捨松にはこの勉強が他のどれよりも一番むつかしかったといっている。[17]

健次郎の手紙の文面にある週十五ドル云々というのは捨松の生活費のことで、ベーコンが事前に健次郎に打診したことに対する承諾である。当時日本政府は留学生の経費として一人当り年間七〇〇ドルから一〇〇〇ドルを見込んでいたから、週十五ドルはふつうである。健次郎の手紙の文面は『ベーコン家文書』に残されている次の「覚え書」と符号する。

レオナード・ベーコンは捨松を預るに際して、森有礼に出した手書きの手紙の控を「覚え書き」として手許に残していたのであるが、『森有礼全集』にはこの手紙は収録されていない。親日家のアメリカ人がどういう教育としつけを日本人少女に与えようとしたのか、少女を預かるに際してどんな契約がそこになされたのかなどを知る手がかりとして、非常に興味深いので全文を載せておく。

New Haven Oct. 31, 1872

Hon. Mr. Mori,
Dear Sir,

I respectfully submit to you the following *memorandum* of the conditions on which the two Japanese young ladies are this day received into my family, and of the care and responsibility which we as a family assume in their behalf.

1. We (Mrs. Bacon and myself) receive them not as mere boarders and lodgers, but as if they were the children of some near friend, who would expect us to have a parental care over them, and to treat them with all parental kindness,…or as if they were our grand-children. Mrs. Bacon and my daughters will be watchful over the health, morals, and manners of these young ladies, and will take care that their training is like that of daughters in the best New England families. We expect them to acquire that knowledge of domestic duties and employments which qualifies an American lady to become the mistress of a family. We expect that they will be taught and will be willing to learn whatever our own daughters learn of work proper to a lady who may have occasion not only to direct the servants in her house but often to teach them how to perform their work. Till they shall have sufficiently acquired the use of the English language, and it shall be thought best for them to attend some school, or to receive lessons at home under masters, they will be learning from my wife and daughters the art of reading and writing in English, and as much of Arithmetic and Geography as will prepare them to enter a suitable school. When they shall have learned to read English with sufficient facility, we will take care to interest their minds in such books as will be useful to them.

2. My understanding is that for boarding, lodging, washing, and all this care and instruction, the compensation is to be fifteen dollars a week for each of the two young ladies, payable quarterly, namely for the first quarter at the end of six weeks or on the 12th of December next, and thereafter on the 12th of March, June, and September.

3. Medical advice and aid in case of illness, with other extraordinary expenses thus arising, will be an additional charge and will be met in the quarterly payment next succeeding.

4. Instruction on the piano will be given at present, if desired, by competent teachers in my family ; and the charge for instruction, with the use of the instrument, will be at the rate of forty dollars for a year to each of them. Whenever Mr. Mori, or his successor in the guardianship of the young ladies, shall determine to employ a professional music-teacher, the charge for the use of the piano will be to each of them eight dollars for a year.

5. I reserve the power of annulling these arrangements at any time after giving six weeks' notice ; and I concede the same power to Mr. Mori or his successor.

I have the honor to be
Very respectfully, Yours,

P. S. I have omitted to mention that the books and stationery, purchased for the young ladies, will be a separate charge in the account of their expenses ; and that Mrs. Bacon will procure for them, at their expense, all necessary articles of apparel so that they shall continue to be dressed in a style suitable to young ladies in a family like ours. If an allowance is made to each of $150.— a year for clothing and incidental expenses, we will make the expenditure as much less than that amount as we can with a due regard to propriety, and promise that it will not be more than the allowance.

Leonard Bacon

ニューヘイヴン　一八七二年十月三十一日

森閣下

拝啓　若い二人の日本婦人（筆者注―捨松と繁子。繁子は後にアボット家に引取られる。）を本日わが家へ受け入れました条件と、彼女たちのために家族としてわれわれがなすべき養育と責任について、次のような「覚え書き」を謹んで提出いたします。

一、われわれ（妻と私）は彼女達を単なる下宿人や間借人としてではなく、どんな親もが示す細心の配慮で養育して欲しいと思っている親しい友人の子どものように、また、彼女達が私達の孫娘であるかのように、お預りいたします。妻と娘達はこの若い婦人の健康、品行、行儀作法などに注意を払うでしょうし、しつけはニューイングランドの家族における最良の娘となるようになされるでしょう。私達は、彼女達が家庭の主婦となるアメリカ婦人に必要な家政上の義務と仕事の知識を身につけることを期待しています。私達の娘は家の中で召使いを指図するだけでなく、必要なときには召使いに自分達の仕事をちゃんとやれるように教えることのできる婦人にふさわしい仕事をあれこれ学んでいるのですが、彼女達がそういうことをなんでも教えられ、また教わる気持になることを期待しています。彼女達が十分に英語を駆使できるまで、また学校に通うのが最良のことと思われるまで、あるいは家庭教師の指導の下に家庭で学習するのが一番よいと思われるまで、英語の読み書きと、適切な学校へ入るための準備となる算術と地理も、妻と娘から学ぶでしょう。彼女達が十分に英語を読みこなせるようになったら、彼女らに有益と思われる本に興味を持つように育てます。

二、私の理解では、食事代、部屋代、洗濯代、養育と指導に対する報酬は、少女一人当り一週間に十五ドルの割合で年四回に分けて、すなわち最初の三ヵ月分の支払いは六週間後の十二月十二日にその後は三月、六月、九月のそれぞれの十二日に支払われるものとなっています。

三、病気の際の医療と看護、その他特別の費用を要した場合はその経費が加算され、次の三ヵ月分の支払いの時に合算されます。

四、ピアノの稽古は、もしお望みなら、わたしの家族にいる有能な指導者によってすぐに与えられます。稽古料は楽器の使用料と共に一人当り一年に四十ドルの割合です。森氏または少女の保護に責任をもつ後任者が専門の音楽教師を雇おうとお決めになるなら、そのときはピアノの使用料は一人当り年八ドルとなります。

五、通告して六週間後には、いつでもこの取り決めを破棄する権利をもつものといたします。そして私は森氏あるいは彼の後任者も同じ権利があることを認めます。

敬具

追伸

二人の少女のために購入される本と文房具は、彼女達の経費とは別の勘定になることを言い忘れました。妻は、彼女達の費用で、われわれと同じようなくらし向きの家族の少女にふさわしい衣服をいつも着ていられるように、必要な衣料品を購入いたします。もし衣服と雑費として年に一人一五〇ドルをお認め下さるなら、われわれは生活を見

苦しいものにせぬことに十分配慮しつつ、その金額より可能な限り少ない額に出費を押えるでありましょう。そしてその金額以上にならぬことを約束いたします。

レオナード・ベーコン

捨松たちはニューイングランド地方の中産階級の家族の一員として養育され教育を受けることになった。それは将来の教養ある家庭婦人を目指すものである。森有礼や黒田清隆が女子教育に熱意を示して女子留学生を実現させたのは、富国強兵につながる過程で新国家建設を担う国民は、賢い母から生まれ育てられねばならぬと考えたからである。そのためには西欧諸外国の女性に対する教育観を手本として、幼い少女を将来の母親として教育を受けさせようというものであったから、ベーコン家の養育方針は政府にとって望ましいものであった。「覚え書き」にある経費についての細い計算はさすがに欧米的合理主義で、請求するものはすると、最初から契約を交わしている。礼拝について何も触れていないのは、事前に健次郎の意向が伝えられていたこともあるが、信仰は本人の問題であることをベーコンは牧師として一番よく理解していたからである。

ベーコン家には捨松より二才年長のアリス（Alice Mabel Bacon）がいた。アリスはレオナードの末娘であるが、後にヴァージニア州ハンプトン市の師範学校の教師をしているとき、津田梅子から華族女学校教師を推薦され、明治二十一年（一八八八年）に来朝、契約の一年を終えて帰国しているが、梅子の塾設立のときは再び来日（明治三十三年）して開校を援けて二年滞在している。明治三十八年に三たび訪れているが、このときは津田塾の発展の様子を見に来たにとどまった。

アリスには“Japanese Girls and Women”(1891), “A Japanese Interior”(1893), “In the Land of Gods——Some Stories of Japan——”(1905), “Human Bullets——A Soldier's Story of Port Arthur” translated with Mr. Honda, (1907)（桜井忠温著『肉弾』の訳）など、日本に関する著作や論文、講演が多数残されている。最初に書かれた『日本の女性』はアメリカでよく読まれた本であるが、アリスはこれを書くにあたって、再度留学してブリンマー・カレッジに入学していた梅子を夏休みにハンプトンの自宅に招き、質問したり、意見を聞いたりしている。このことが梅子をして日本女性の現状を深く考えさせるきっかけとなり、自らの使命は女子高等教育の開拓であるという決意を固めさせたといわれている。[19] アリスはこの書物を「成人して境遇が変り別れ別れになっても、不変のゆるぎない少女時代の友情の名において」という献辞を添えて捨松、大山巌伯爵夫人に捧げている。捨松はすでに大山巌に嫁していたからである。

（6）

さて、捨松はベーコン家から六年間、小学校と女学校へ通学した後、明治十一年（一八七八年）にヴァッサー・カレッジに進学した。フェアヘイヴンのアボット家に預けられた繁子もヴァッサーの音楽科に入学し

ている。ところが明治十四年（一八八一年）春、開拓使より帰朝の用意を命じてきた。繁子はその秋に命令どうり帰国したが、梅子と捨松は更に一年の延期を請い、翌年の帰朝を許された。

明治初年の外国留学は政府の奨励もあって公費私費とも年々増加の一途をたどり、明治六年には三八二名に達している。[20] 彼らの中には相当の年数を経過したものや、不規則放縦なものもあって、明治七年には少数の者を残して大多数の留学生を帰朝させることになった。捨松らは申し渡された「洋行心得書」の一条に、「年限ノ義ハ別段御定無ゝ之候得ドモ、凡十ケ年ハ御許容可レ被レ下候事」とあるように、およそ十年の予定で選ばれていたので、この時は別に帰朝命令を受けなかったのであるが、健次郎の方にはその命令が下った。

健次郎は今日のイェール大学理学部の前身にあたる Sheffield Scientific School に、入学前に三角法を勉強するという条件つきで入学を許され、ニューヘイヴン市内に住んでいた。当時の理学校には物理学を専攻するコースはなかったので、「いくらか物理学の素養になるようにと土木工学を選択して、その方へ入学し」、後には Graduate Course の数学等にも出席している。健次郎が物理学を学ぼうと決意したのは、前述した航行中の船が太平洋の真中で郵便物の交換を行った場面に出喰わしたこと以外に、理学校に入学した年にユーマンズ（Edward L. Youmans）の発行した雑誌を読んだことが、彼の決意をうながしたのである。健次郎は次のように回顧している。

「この頃ほど自分の前途について考えたことはなかった。丁度その頃ハーバート・スペンサーという人の新哲学の本が出来て、これは若い人の思想上に大変影響を及ぼした。ニューヨークにいたドクトル・ユーマンズという人がポピュラー・サイエンス月報という雑誌を創刊せられ、スペンサー学を大いに鼓吹したのでありました。ユーマンズの考えを私が段々考えてみると、どうしても日本を盛んにしなければならぬが、それには政治をよくしなければならぬ。然るに政治をよくするには社会をよくしなければならぬ。社会をよくするには社会学の研究が必要である。社会学の研究には生物学並びにその他の自然科学の研究が心要である。就中、国を富まし兵を強くするには物理化学が盛んにならなければならんと考えて、物理学を学ぶことに決心した。[21]」

ユーマンズの The Popular Science Monthly が創刊されたのは一八七二年で、その目的は日進月歩の新科学知識を一般の人々の間に普及することにあった。ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）の進化思想にもとづく科学的世界観に傾倒した編集者ユーマンズの所説に触発されて、健次郎は「社会」を「生物学並びにその他の自然科学」と結びつけて考え、まわりくどい考え方で物理学を学ぶ決意をしたのである。

ところが、あと僅か一年半で卒業というところで、帰国命令が下った。ひとたび理学の研究に着手した以上、あくまでその目的を貫徹せねばやまないと固く決心した健次郎であったが、肝心の学資の途を絶たれることになった。困窮を知って同級生は、自分の伯母にあたる富豪の夫人に健次郎を紹介したところ、彼女は健次郎に同情して学資の負担を申出たが、その時に出した条件が興味深い。「学業成就して本国に帰りたる後は、力の限り本国の為に盡すべし」という意味の誓約書を書くことであった。これには健次郎も非常に感銘したという。[22] ここには学問を志

す異国の有為の青年に対するほんとうの援助の姿がある。健次郎はこの夫人の肖像写真をずっと応接間に掲げ、後々まで感謝の念を忘れなかったという。

健次郎はこの奇特な夫人の援助によって残る一年半の学業を終え、イエール大学を無事卒業して明治八年に帰国するのであるが、その間、ワシントン公使館からの度重なる帰国命令に叛いての勉学であるから、学資の心配はなくなったとしても、目的貫徹に対する健次郎の強固な意志を知ることが出来る。一藩臥薪嘗胆、一家貧窮困苦のうちに故国を出た健次郎にとって、学半ばにしてアメリカを去ることなどとても出来なかったのである。

健次郎は帰朝した翌明治九年に東京開成学校（後の東京帝国大学）教授補に任じられたが、山川家の暮しぶりは相変らずであった。明治十二年になってベーコン夫妻に宛てた手紙には、「帰国の際に依頼されていた絹の購入は、妹捨松がお世話になっているお礼に贈物として送りたかったので、私に預けようとされた代金を受け取らなかったのだが、実は帰国してからずっと手許不如意で計画を果すことが出来なかった。遅くなったが今約束を果したいので、どんな絹をご所望なのか知らせて欲しい」といった内容が書かれている。[23] 帰国してからこの手紙を出すまでに四年を要しているが、その間決してベーコン夫妻の頼みを忘れていたわけではないのである。健次郎はこの年の七月に東京大学理学部教授に昇進しているから、この頃になってやっと余裕が出来たのであろう。兄浩もこの時はすでに陸軍省に勤めている。それまでの山川家の台所の苦しさはひとかたならぬものであった。それは山川家の人々が自分達の暮しだけを考えていたのではなかったからである。

（7）

健次郎と捨松がアメリカへ渡った後の山川家の経済状態については、柴五郎（元会津藩士子弟、後に陸軍大将、『佳人之奇遇』の著者東海散士・柴四朗の弟）が少年時代を回顧した文の中で知ることができる。

明治五年に十四才になった柴五郎が青森から東京に流浪してきて山川家を訪れたとき、家族のほかに旧藩の書生が多数寄食していて、一見して困窮の模様であったという。それなのに浮浪者同然の姿の柴五郎はいつでも来てよいといわれ、入れ替り立ち替り多くの書生が毎日泊っていく中で、この上とても自分が世話になるのは無理だとわかっていても、他に頼るところもなく結局寄食する。晩秋だというのに汚れた白地の浴衣一枚の柴少年を母唐衣と常盤が気の毒がり、アメリカ留学中の捨松の裾模様の袷の袖を短くして与えるなどしている。柴五郎は、少女の着物を着ていてよそ目には異様に映ったかもしれぬが暖かくて満足だったと述べている。れっきとした会津藩士の子弟ながら斗南で辛酸をなめ、落ちぶれた下僕生活をくりかえしていた柴少年にとって、山川家の人々の温情はひときわ身にしみたのである。全く家族の一員同様に遇されていた柴五郎が云いつけられる用といえば使いくらいであったが、その使いは質屋へ行くことで、一ヵ月に二、三回にとどまらなかった。食事も乏しく、ご馳走といえば豆腐と煮豆だけである。その困窮ははなはだし

く、浩はついに五郎から預かった金の借用を申し入れるほどであった。「元家老の身が、下僕同様の余に借金を申し入るるはよくよくのことならん。余、もとより反対の理由なければこころよく承諾す。山川母子ともども悦びの礼を言う。余、戸惑いて挨拶の言葉を知らず。金額は青森出発以来使用せずに蓄えたる十三円五十銭の虎の子なり。[24]」と五郎は書いているが、当時の山川家の家計は、まさに火の車であったことがよく知れる。健次郎も捨松もこういう家の状態をあとにしての留学であった。

ちなみに、惨憺たる生活を送っていた柴五郎が幼年学校に及第したとき山川母子はわが事のように悦び、とりわけ唐衣は洋服姿の五郎の両肩に手をおいて涙を流したという。会津での戦争で柴家の女性は祖母、母、兄嫁、姉、そして七才の妹まで自刃して果てているのである。山川家の人々は苦難の運命を共にした旧藩士の子弟に、自らの窮乏を顧みず、終始変らぬ情愛でもって心からの援助を差しのべたことがわかる。

アメリカから帰国した健次郎も同様に、旧会津藩子弟の育英に意を用い、会津学校会（後の会津育英会）を設立したりしているが、これは、わが身が一アメリカ婦人より受けた篤志を、同じ苦境を味わっている前途ある同郷の子弟に与えるという形で返報したともいえよう。

（8）

ニューヘイヴン・ハイスクールを経てヴァッサー・カレッジに入学した捨松は、成績も優秀でクラスの人気者であった。英文学を専攻して、シェークスピア・クラブのメンバーになっている。二年生のときにはクラス委員長に選ばれ、新入生を迎えるスピーチをおこなっており、大学の創立記念日には、目もさめるような美しい日本の着物を着て、実行委員長の役を立派にこなしている。大学の校内誌にも度々寄稿しているが、それは日本の「革命」（維新）と日本人について紹介する記事である。

クラスの信望を集め、充実した大学生活を送った捨松は明治十五年（一八八二年）六月十四日ヴァッサー・カレッジを卒業した。卒業に際して彼女は名誉ある卒業生代表の一人に選ばれ“British Policy toward Japan”と題して記念演説をしている。論旨は条約改正に関するイギリスの対日姿勢を理路整然と批判したもので、「完璧なまでに、英国の保守主義な政策を理解しており、アメリカの自由と友愛の精神に対して惜しみない賛辞を送っている」と、ニューヨーク・タイムズに取上げられており、「卒業生および参会者は眼に涙を浮かべて彼女の演説をきいた」（『シカゴ・スタンダード』一八八二年六月二十二日付）ほどに、満堂の聴衆を感動させたという。日本でも『朝日新聞』（明治十五年七月二十九日付）が捨松の演説を報じてその模様を伝えているが、それは捨松一身の栄誉にとどまらず、我が日本国の一大面目だと述べている。

当時わが国は西欧諸国との不平等な条約を改正したいと苦慮していたのであるが、捨松は日本の立場をアメリカで堂々と主張したのである。しかし幼くして日本を離れ、十一年余もアメリカにあって、日英の国際関係を卒業演説で論じられるほど、捨松が日本の政治状況によく通じていたとは思えない。それは健次郎の情報と意見が少なからず反映してい

たものであることは明らかである。故国からの健次郎の便りには、日本政府の動向や国際政治に関するものが多く、もっと家族のことを知らせてくれればよいのにと捨松が級友にこぼすほどだった[25]ということからもわかる。それにしても、捨松自身に問題への関心と公的な場で日本のおかれている立場を訴えようとする勇気がなければ、こういう題目は選ばれるものではない。そこには捨松の日本人としての自覚とけなげさをうかがうことが出来る。

捨松が少女時代に得意だったのは木登り、駆けっこ、水泳、勉強では自然科学、弁論術であったというから、活潑で理知的な女性であったと思われる。日本に帰えったら生理学と体操を教えたいとアリスへの手紙に書いているほどである[26]。

大学卒業後二ヵ月間、看護学研究のためニューヘイヴン病院で実地看護に従事し、看護婦の免状を取得している。それは決して一時の思いつきからではなかった。ナイチンゲールがクリミヤ戦争を機として看護婦学校を設立したのは一八六〇年のことであるが、彼女の活動と看護婦教育のあり方はすでにアメリカにも紹介されていた。南北戦争を体験したアメリカでは、女子にとって必要な学問として看護学が注目されていた時代であり、看護教育の向上が目指されている時期でもあった。津田梅子が『女学雑誌』に「女子看護法の心得」を連載しているのなどは、彼女もまたアメリカでこういう知識を学んだことを物語っている。それに捨松の場合は、牧師であるベーコンの示唆ないしは感化があったことも充分考えられる。看護活動は従来より博愛慈善事業の一環として宗教上の篤志として行われていたからである。

しかし何よりも捨松にとっては、あの戊辰戦争での体験が大きく働いているといってよい。会津藩籠城の際、当時八才だった捨松は、藩士の妻や娘が負傷者を介護して、繃帯の交換や食事の介助、洗濯などと同時に、苦痛や不安、恐怖に襲われる負傷者たちの不安定な精神を慰め、支える役割を果すのを目のあたりに見ると同時に、砲弾のために重傷を負い苦しむ義姉を何の手当も出来ず失っているだけに、近代的な看護学を是非学んでおきたいと思ったのである。帰国したらあれも教えたい、これも役立つだろうと、胸ふくらませて生理学や看護学を学んだにちがいない。

（9）

明治十五年（一八八二年）十一月、捨松は梅子と共に故国の土を踏んだ。日本を離れて十一年の歳月が流れ、捨松は二十三才になっていた。梅子はすっかり日本語を話せなくなっているのに対して、捨松は日本語を忘れてしまわないために、毎週日本語のレッスンをするように健次郎から命ぜられていたし、繁子と日本語を使う機会もあって、帰国直後、母唐衣が色々の品を取り出して一々その名を聞いたとき、大方その名を言い当て、翌年の正月には歌がるたさえ取ったという[27]。捨松の日本社会への復帰適応は早かったといえる。

しかし、帰えってみれば開拓使はすでになく（十五年二月八日廃止）捨松らの身分は文部省留学生と変化していた。多額の国費を費やして送

り出した女子留学生であるのに、政府からは何の連絡もない。自分の受けた教育を日本のために広く役立てたいと願っているのに、働く学校もなく、学んだ知識を実際に応用する機会もない。

明治新政府の教育政策は、明治五年の「学制」と太政官学問奨励の布告（八月二日）によって略その大要を知ることが出来るのであるが、明治初年には布告の「……自今以後一般ノ人民華士族農工商及婦女子（傍点筆者）、必ズ邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」という言葉に示されているように、女性も男性と同じように学問が必要だと主張されていた。捨松らのアメリカ留学もこの政策に沿ったものであった。東京と京都に官公立の女学校が設立されたのをみても、従来の伝統的女性観とは異った、開明的な女性観の下に女性教育勃興の気運がすでに当局を動かしていたことは明らかである。

しかしこの政策は明治十年頃からその方向を変えていく。女子の小学校への就学率が尚低かった状況だっただけに、その後官公立の女学校はあまりつくられず、教員養成の必要から女子師範学校が明治八年に開校されたとはいえ、開明的な理念の下に設立された東京女学校は経費節減のために明治十年に廃止される始末であった。一般的な教養を与える女子中等教育や高等教育の実現は遅々としてはかどらず、ようやく明治三十二年になって高等女学校令が発布されて、この年以降全国にわたって高等女学校が設立されるようになる。女子高等師範学校は明治二十三年に至って開校されているのであるが、捨松らが帰国したときは、高等教育機関はおろか公立の女学校もほとんどなかったのである。梅子が最初に勤めることになった華族女学校が開校されたのも、帰国後三年の明治十八年である。

男の場合なら大学か官庁への任命が直ちに下るのが文部省留学生の通例であるのに、捨松らにはなんの任命もない。明治初年に彼女達をアメリカへ送り出した熱気はもう失せてしまっていたのである。捨松にとってこのことはまことに不幸であったといわねばならない。何故なら彼女は女子教育に情熱を燃やし有用な仕事につきたいと熱望して、期待と決意を抱いて故国の土を踏んだからである。

その年の暮に永井繁子は海軍武官爪生外吉（後の爪生海軍大将）と結婚した。爪生もアメリカのアナポリス海軍兵学校留学生であり、繁子の寄留先のアボット家の人がこの縁談を取り持ったといわれている。[28] 繁子の結婚は三才年長の捨松に心理的影響を与えたことは充分考えられる。仕事のないいら立ちと失望の中に日を過していた捨松は、翌十六年十一月に参議・陸軍卿・陸軍中将大山巌の後妻として嫁ぐことになる。先妻の残した娘が三人あり、二十才も年上でしかも会津藩の宿敵薩摩の人間で、会津戦争では若松城へ大砲を打ちこんだ人物である。

大山が捨松を見染めたきっかけは、一説には、繁子の結婚披露宴の余興に留学帰えりのメンバーばかりで三井物産社長益田孝（繁子の兄）の屋敷で「ベニスの商人」を英語で上演した際、ポーシャを演じた長身美貌の捨松に大山が目をとめたのだと言われ、一説には、梅子や繁子と益田邸でさっそうとラケットを振る活潑な捨松をたまたま訪れた大山が見染めたとも言われている。[29]

大山の申出に対して山川家の当主、浩は即座に謝辞した。この時浩は陸軍大佐で陸軍省の人事局長をしている。戊辰戦争の際、山川浩（当時、

通称大蔵）の率いる隊はしばしば政府軍を圧倒し、会津に山川浩ありとその名を注目され、戦後政府に迎えられたのである。佐賀の乱や西南戦争の武功もあって、文武両道にすぐれた軍人としてつとに知られていた。今は中央政府に勤めているとはいえ、会津武士としての矜持がある。戊辰戦争はほんの十五年前のことである。薩長藩閥に恨みを抱く会津旧藩士はまだまだ多く、会津や青森や東京で生業につくことさえ出来ず、やっと仕官しても「会賊」とののしられて下積みの職にしかつけなかった状況下で、日頃から旧藩士の行末に心を痛めていた山川浩にとって、彼らの心を逆なでするような薩摩藩の代表的人物と妹の縁談を承諾できるはずがなかった。大山が自分の上司である人物であればなおさらのことであった。出世のために妹を縁づかせたと噂されることは目に見えているからである。何度申出られても山川家は辞退を繰返えしたが、大山の従兄にあたる西郷従道が徹夜で説得にあたり、ついに断り切れなくなって妹の意志を聞くことにしたという。

ところが、捨松はこの話を承諾した。この選択は自分のおかれている当時の社会環境と家族状況を冷静に熟慮した上でのことであったと思われる。留学生活で得たものを生かすのに公的な仕事を求めても望むべくもない。帰国してすでに一年近くなっているのに、政府は彼女達の受けた教育を生かそうとしていない。仕事といえばせいぜい上流階級の娘の個人教授ぐらいである。こういう状況にあって、大山はヨーロッパ留学の経験があり、英仏語を理解して、洋風生活を好み、森有礼から譲り受けた永田町の一七〇〇坪の土地に煉瓦造りの洋館二階建に住まう当代の上流階級者である。外国生活に馴染んだ身にとって欧風生活の采配をふる自信は充分ある。大山のような社会的にも経済的にも恵まれた人と結婚して、そこで自分を生かす道を見つけるのも一つの方法である。相手は薩摩の人間だとはいえ、先方から自分をもらいたいと乞うているのである。捨松はアリスへの手紙に「いろいろ考えた末結婚することにします。わたしがつけそうな仕事はなさそうだし、それならば彼と結婚してその立場から日本の女性のために何かできるのではと思うのですが……」[30]と記している。ここにはアメリカ的合理主義にもとずく論理と、結婚にあこがれや夢を托す女性の心理が垣間見えて興味深い。がいずれにしても、大山との結婚は捨松本人の意志できまったのである。

捨松の決意を促したものに今ひとつ、身辺の事情もある。当時の日本女性の適齢期が十七・八才であってみれば、母唐衣は二十三才の末娘の縁談にはそれなりに心を砕いていたであろう。普通の娘とはちがった特別な生い立ちを過しているだけに、なお一層悩んでいたにちがいない。前年に年少の繁子が結婚したのも母娘に刺戟になったと考えられる。捨松は老いていく母親に安心を与えたい気持があったであろう。また大山が浩の上司である点は、浩の立場からすれば固辞する材料であっても、捨松にとってはむしろ考慮の対象になる事柄である。幼い時にアメリカへ渡り会津人という意識より日本政府の留学生という意識を常に持っていただけに、藩観念は薄れてしまっている。

捨松は諸々の事情を勘案した上で、自分を社会的に生かす一番手取り早い道として、合理的に結婚を選んだと同時に情緒的にもそれを決定したといってよい。明治十六年十一月八日、大山巌と山川捨松の婚儀がとり行われた。鹿鳴館の開館式はこの二十日後である。捨松が外国流の作

法や教養を身につけた陸軍卿夫人として「鹿鳴館の花」とうたわれたのは周知のとうりである。

（10）

捨松は結婚後矢つぎばやに三人の子どもを産み、先妻の残した七才、四才、二才の三人の娘と共に六人の子どもの母親として、また大山家の主婦として多忙となる。困ったときには女高師の舎監を勤める姉の二葉に来てもらって助けてもらっている。

梅子と繁子と捨松の三人の友情はその後も固く結ばれ、生涯にわたって交流がつづいている。梅子が女子英学塾を設立するにあたっては（明治三十三年）、捨松はアリス・ベーコンと共に全面的に支援している。同窓会創設のときは会長に推されるほど塾とは密接な関係をもっていたし、校資募集委員会々長としてアメリカからの多額の募金集めにも尽力している。梅子が滞米不在中の年の卒業式には自ら卒業証書を手渡したり、塾関係の会合に邸宅を開放したりするなど、津田塾の発展に献身的な援助を行っている。自分の果せなかった女子教育の夢を梅子に託していたともいえる。

捨松が行った活動で注目すべきは、看護教育の導入と日赤篤志看護婦人会の活動である。薩摩藩の軍医でウイリスの指導を受けた高木兼寛は、ロンドンの聖トーマス病院医学校への八年間の留学から帰国して後、医師養成の必要性を痛感して成医学講習所（後の慈恵医院医学校）を設立する一方、華族らの寄附を集めて経済的に恵まれぬ病人を治療する「有志共立東京病院」（後の東京慈恵医院）を明治十七年に開設した。開院して間もないある日、前年に大山巌と結婚したばかりの捨松が見学に訪れ、この病院に一人の看護婦もいないのを質しその理由を高木にたずねたところ、「金がない」とのことに捨松は直ちにその資金を引受けた。鹿鳴館のバザーはこうして開催されることになる。そのときのバザー収益金一万六千円余りと其他が、わが国最初の看護婦養成所設立の基金になったのである。[31] 高木は早速米国よりミス・リードを招き、明治十七年十月看護学の講習を開始した。わが国における近代的看護教育のはじまりである。

高木が留学していた聖トーマス病院医学校にはナイチンゲールが看護婦学校を設立していたから、彼は看護教育の必要性も看護婦の何たるかも十分に知っていたであろうが、捨松の看護婦教育への積極的な関心と尽力が、養成所設立の第一歩を導いたといえる。アメリカで看護学の教育を受け、病院で実習も行った捨松にとって、一部の医師や一般人に看護婦の仕事を啓蒙する必要を痛感していた上に、質の高い看護婦を養成する教育は、女子の高等教育に情熱を持ちながらその希望が満たされない状態にあっただけに、労を惜しまずその後もこの病院に援助の手を差しのべている。慈善バザーを催して資金を集めようという発想はアメリカでの経験がもたらしたものである。それにしても捨松の決断力と実行力は、自信と能力を備えた女性の姿をよく表わしている。

ついでながら、同志社が明治十九年に病院を開設し、同時に京都看病婦学校を発足（明治三十六年に廃校）させた際、この病院と学校に力を

尽した新島襄の妻八重子は、会津藩砲術指南役で蘭学者だった山本覚馬の妹である。八重子も戊辰戦争時には籠城して兄と共に戦闘に加わっている。東の慈恵、西の同志社と日本で最初の看護婦学校が会津籠城中に救護看護を経験した女性の援助の下に、ほぼ同時期に開かれたのは興味深い。

明治二十年に日赤篤志看護婦人会が設立されると、捨松は発起人に名を連ねただけでなく、日清日露の両戦争の時には特志看護婦とし傷病兵の看護につとめている。日赤本社病院での奉仕活動や患者の慰問など、看護婦という職業を広く一般に印象づける働きをし、青山女子学院で家政、育児、看護法の講義を週に一、二回したという。[32] 青山女子学院は梅子の父津田仙が設立にあずかった海岸女学校の後身であるから、そのつながりで出講したのであろう。

日露戦争はわが国の国運をかけた総力戦であったこともあり、総司令官夫人として傷病兵の繃帯巻など救護活動に献身的に努めているが、同時にアメリカの友人にこの戦争における日本の立場を訴える手紙を書いたり、新聞に寄稿したりしている。これらの手紙や新聞寄稿はアメリカの世論を喚起して日本の立場を理解させる働きをしており、日本への支援と募金に応じたアメリカ人も少なくなかったのであり、後の講和条約にも影響をおよぼしている。

捨松の社会的活動は上流階層夫人連中に、その地位を占める者が当然負わねばならぬ noblesse oblige の精神を教え、アメリカでは早くから行われていた奉仕活動を身を以て示したことに意義がある。

捨松の活潑で積極的な行動力は、家庭の中でも発揮されて、家事と育児と夫人外交の仕事を次々とこなすだけでなく、不動産売買の契約や田畑の小作人の管理までやってのけている。『報知新聞』は大正七年一月から「名流の生活振り」と題して、上流有名人の生活近況を順次伝えているが、一月二十六―二十九日は大山家の紹介をしている。それによると、明治二十年に建てて三年にしかならない永田町の自宅をひき払って陸軍大臣官舎に移った際、洋館の自宅を外人に貸すことになり、捨松は数人の外人の借手と家賃の交渉を行い、年三千円で貸すことになった。そのときの家賃五年分の一万五千円で青山の邸宅を購入し改築したという。この間、夫巌は捨松にまかせ切りであったため、いつの間にか宏大な邸宅が自分のものになっていると聞かされ驚いたという。また夫亡き後は那須の別荘近くの田地を整理し、雇人制から小作制に改めて収穫量を増やしたり、使用人を半分以下に減らして切りつめ、遺産の整理を立樹何本に至るまで帳面にしたためさせて管理したとある。

当時の上流貴婦人が対外的に金銭交渉をすることなど、はしたない行為と思われていたし、女性が契約や取引に手腕を振うのは珍らしい時代だけに、新聞の口調は「算盤高い」「男勝り」の夫人として、好意的な叙述ではない。しかしベーコン家で家庭の主婦としての家政上の義務と仕事を学び、アメリカの教育を受けた捨松にとっては、大山家の資産をふやす努力をし、それを管理するのは妻として当然のことであった。アメリカ人には高く評価されても[33]世間ではそうでなかった。捨松が徳富蘆花の『不如帰』のモデルにされたのは明治時代の日本女性には稀なこうした活動が世間では男勝りと映っていたことが背景にある。

大山巌の先妻の長女信子は明治二十六年に三島通庸の長男で、早くか

らアメリカに留学してM・Aの学位をとって帰国し、農商務省の技師をしていた三島弥太郎と結婚した。新郎二十七才、新婦十七才であった。しかし新婚二ヵ月で肺結核に患り、実家にもどってきて二十九年に二十才で亡くなった。『不如帰』は『国民新聞』に明治三十一年十一月二十九日から翌三十二年五月二十四日まで連載された武男と浪子の純愛物語であり、封建制下の姑嫁関係の小説であるが、信子を片岡中将の娘浪子に、弥太郎を川島武男大尉に配して描かれ、浪子は婚家の姑から離縁を申立てられ、実家の継母からは辛くあたられる薄幸の女性として多くの読者の涙を誘った物語である。

しかし、大山家、三島家はモデルにされたとはいえ、『不如帰』はいわゆるモデル小説ではない。事実としてあったのは、信子が新婚二ヵ月で肺結核に患ったこと、転地療養などしているうちに、結核といえばほとんど死病と怖れられていた当時のことゆえ話はついに離婚問題にまで発展し、父大山巌が怒って娘を引きとり、わずか半年余りで離縁になったこと、大山邸内に特別に隔離した部屋を新築して信子を療養させたこと、巌は一生の名残りに信子を連れて京大阪へ旅行したこと、葬式の日に三島家から届いた生花は突返えされたこと、これだけの事実があっただけである。亡夫が大山巌の副官をしていた関係で大山家に出入りしていた未亡人からその話を聞いた蘆花が、作品の登場人物を単純な善人群（武男、浪子、片岡中将、ばあやのお幾など）と悪人群（千々岩、山木、姑の川島お慶、継母の繁子など）に色分け、類型的な人物像に脚色して小説に仕立てあげたフィクションなのである。決して事実調査の上で書かれた作品ではない。

蘆花が『不如帰』を書いたのは、その未亡人の話の中に、信子が臨終に言ったという「もうもう二度と女になんぞに生れはしませんよ」の一言に、「小説だ！」と閃いたからだといわれている。[34] もともと『不如帰』は封建的家族制度下における女の運命に対する同情と抗議をこめて書かれたはずであったのに、継母の繁子（捨松）と姑のお慶（三島和歌子）が実に単純な継母根性、姑根性に描かれ、新派的悲劇の通俗小説に押し流されてしまっている。フィクションであるにもかかわらずモデルにされた捨松はやり切れない思いであったろう。

しかし継母の捨松が実際に信子に対してとった態度は、小説の中の人物とは全く異っていたといわれている。結核に罹患して婚家から戻った信子を捨松は離れの部屋に隔離し、食器や寝衣など家人のものと区別して消毒を行うなどの処置をしたことが、虚実とり混ぜて蘆花の耳に入り、脚色されて小説にされてしまったのである。アメリカで看護学を学んだ捨松にとって、伝染病は隔離して治療にあたるという衛生学上の当然の処置が、当時の衛生知識の低い一般の人の目には、座敷牢に閉じ込めて継子いじめをしているように映ったのである。それでなくても一般に上流階級の継母子の家族関係は好奇と偏見の目で眺められるものであり、捨松のアメリカ流の躾も誤解されていたであろう。『不如帰』が評判になればなるほど、大山家は苦境に立ち、捨松は心に傷を負ったといえる。

（11）

大正五年に大山巌が七十六才で病没した三年後の大正八年（一九一九年）二月十七日、捨松は五十九才にもう数日というところで世を去った。梅子が病に倒れ、塾長辞任を申し出たため、津田塾の理事会が選んだ後任候補者に就任依頼に行くため風邪気味なのに折からの寒さの中をおして出かけ、風邪をこじらせて肺炎を併発したのが原因であった。梅子の病状を気づかい、沼津の大山家別邸に梅子を静養させたりしていた捨松の方が先に逝ったのである。梅子は昭和四年に六十四才で没し、繁子はその前年の昭和三年に同じく六十四才で亡くなった。

捨松の一生は、幕末から明治前半の社会の変動が一人の女性に集約されたかたちで、典型的に体現化されたところに特色がある。幕府にもっとも忠誠をつくした会津藩の家老の末娘に生れ、平穏で恵まれた幼児期から、一転して敗戦と辛酸の生活を体験した子ども時代を経て、明治政府の開明政策がとられると同時にアメリカへ留学し、その政策が国家主義の方向へ転換する頃に帰国すると、捨松自らかっての会津藩の宿敵薩摩人で陸軍の最上部にいる人物と結婚するという劇的なその生涯は、そのまま明治初期社会の変動を個人の一生の中に映し出している。しかしここには時代に翻弄されたとはいえ、むしろ積極的に時代を先取りして生きた姿がある。

さて、明治政府の近代化政策の一環として、女子教育振興の名の下にアメリカへ送り出された五人の女子留学生の人生経過を顧みるとき、ただ一人津田梅子だけが女子高等教育に功績を残した以外、あとは上流社会の良妻賢母に終ったという評価が一般的である。

捨松個人の生涯をふり返えって、ただ上流階級夫人としてだけでなく、自分が受けた教育の効果的な還元を意識し、社会的に活動する場を常に求めていた点において、留学生であったことの自覚と責任に満ちた一生であったといえる。しかし留学生の中で一番俊才をうたわれ、国際感覚を身につけて社会を見る目をもっていた捨松が、「日本が必要としているのはただ教えるということだけでなく、社会全体の改革である」と考えていたほどであったのに、その問題意識を燃焼しつくしたとは言い難い。明治政府の女子教育政策の転換が、捨松の抱いていた女子教育に携わる目的をかなえさせなかったとはいえ、彼女の生涯を定めた一番の岐路は結婚である。

大山巌と結婚した時点で捨松の「改革」の対象は家庭生活の領域が主にならざるを得なかった。名流夫人となり、すぐに六人の子どもの母親になった身であってみればそれは当然ともいえる。たしかに看護婦教育導入の糸口を果したり、日赤篤志看護婦人会に力を尽したり、津田塾を支援したりしたが、いずれも大山巌夫人としての地位と名声にもとづいての活動であった。大山巌夫人の肩書きを活かして社会的に活動することは、捨松にとって当初よりの目論見であった。その点では十二分に働いたが、そこに限界もあった。津田梅子が独身のまま女子教育への情熱を燃やし続け結実させて、自由に活動を拡げていったのと対照的である。

しかし捨松の家政的手腕は世間一般からみれば男勝りと映るほどに行動力に富んだものである。決して古い伝統的因習にとらわれた、夫に従属した妻ではなかった。この点ではニューイングランドの中産階級直伝の良妻賢母であったといえる。彼女の改革への意欲と実行力を完全なかたちで社会の場で発揮するには、捨松は一〇〇年早く生れすぎたといえよう。

（付記）本稿は一九八四年十一月六日に行われた神戸女学院同窓会主催の講演をまとめたものである。

註

1 Charles Lanman, The Japanese in America, 1872, pp. 54

2 『男爵山川先生遺稿』（以後『山川先生遺稿』と略す）、昭和十二年、三—四頁。『男爵山川先生伝』（以後『山川先生伝』と略す）、昭和十四年、三頁。

3 長姉二葉は会津藩家老梶原景雄に嫁いだが、わけあって離婚復籍し後に東京女子高等師範学校の舎監を勤め、長兄浩は会津藩青年家老を経て、後に陸軍省人員局長、東京高等師範学校長、次姉三輪は会津藩士桜井政衛に嫁し、三姉操は同藩士小出照の妻となったが、夫が佐賀の乱で戦死したので復籍、ヨーロッパへ遊学した後に宮内省権掌侍として昭憲皇太后に仕える女官となった。次兄健次郎はイエール大学で物理学を専攻し、後に東京帝国大学総長となる。わが国第一号の理学博士でもある。四姉常盤は浩の養弟で検事正山川徳治（旧姓徳力）と結婚して次姉同様家庭にあった。（宮崎十三八「山川家の人びと」『歴史への招待』第二九号、七〇—七一頁。）

4 『山川先生遺稿』十三頁。『山川先生伝』六頁。

5 『山川先生遺稿』十九頁。『山川先生伝』三一頁。

6 久野明子「アメリカの資料にみる山川捨松」（『会津史談』第五四号、昭和五六年。）

7 『山川先生遺稿』四三頁。『山川先生伝』六二頁。

8 大山柏「母の生涯と我が思い出」（『会津会々報』第七六号、昭和四二年。

9 『山川先生遺稿』四九頁。『山川先生伝』六八頁。

10 「大山公爵夫人秘められた手紙」（『歴史への招待』第二九号、日本放送出版協会、昭和五九年、七三頁。）

11 津田塾大学『津田梅子文書』一九八〇年、八三頁。

12 吉川利一『津田梅子』婦女新聞社、昭和五年、附録二九二頁。

13 Charles Lanman, op. cit., p.60.

14 "The Bacon Family Collection," Box No. 9, Folder No. 162, Sterling Library, Yale University

15 『津田梅子文書』一九八〇年、八五頁。

16 『山川先生遺稿』二五三—四頁。

17 久野明子、前掲書、一六六頁。

18 "The Bacon Family Collection," Box No. 9 Folder 162, Sterling Library, Yale University.

19 吉川利一、前掲書、一四六—七頁。

20 渡辺実『近代日本海外留学生史上』講談社、昭和五二年、二六八頁。

21 『山川先生遺稿』五三頁。

22 『山川先生遺稿』五四頁、『山川先生伝』七八—九頁。

23 一八七六年四月二一日付のベーコン夫妻宛のものである。"The Bacon Family Collection," Box No. 10, Folder 188, Sterling Library, Yale University.

24 石光真人編著『ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺書—』中公新書、昭和四六年、一〇〇頁。

25 久野明子、前掲書、一六七頁。

26 『歴史への招待』二九巻、七六頁。

27 吉川利一、前掲書、一一九頁。

28 『津田英学塾四十年史』、昭和十六年、四三六頁。

29 久野明子、前掲書、一六九頁。

30 『歴史への招待』二九号、八〇頁。

31 中央職業紹介所事務局編『職業婦人調査、看護の部』昭和二年、三頁。この慈善バザーの模様は揚州周延筆による三枚組の明治錦絵「鹿鳴館貴婦

人慈善会図」として東京都立中央図書館に残されている。

32　大山柏、前掲書。

33　C・B・デフォレスト著、別府恵子他訳『パン種としての日本女性』（春秋社、一九八四年、一〇一頁）には、「……大山家の財産を並々ならぬ腕で管理しながら農地を改良し、彼女独特の方法で大いに生産性を増したこと……」を捨松の能力と教育の成果として高く評価している。

34　中野好夫『蘆花徳富健次郎』第一部、筑摩書房、三七〇頁。昭和四七年。

（原稿受理　一九八四年十一月三〇日）